



TITLE:

変異研究部門(I 研究所の概要)

AUTHOR(S):

野沢, 謙; 江原, 昭善; 和田, 一雄; 西邨, 顕達; 庄武, 孝義

CITATION:

野沢, 謙 ...[et al]. 変異研究部門(I 研究所の概要). 霊長類研究所年報 1974, 3: 7-8

ISSUE DATE:

1974-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162539>

RIGHT:

究において、ニホンザル・タヌキ・キツネ・ツキノワグマの生態研究を行ない、農林学との関係及び生態学的管理方法の考究を行なった。

6) ニホンザル研究林設置のための基礎調査等

川村俊蔵・東 滋

野生ニホンザルの安定した研究地を確保し、共同利用研究所として活用する計画を推進するため、これまで行なっていた基礎調査を強化するとともに、関係者との間の調整を行なった。この結果、下北・木曽・屋久島の三研究林予定地に関してほぼ準備を整えることができた。

総 説

- 1) 河合雅雄 (1972): 比較霊長類 社会学。バイオテク 3: 407-412。

論 文

- 1) 川村俊蔵 (1972): 台高山脈における 大型哺乳類の調査結果と今後の保護について。大杉谷・大台ヶ原 自然科学調査報告書 (三重県自然科学研究会) pp. 131-141。
- 2) 川村俊蔵・他 (1972): 滋賀県の 自然保護一総論と総括。滋賀県の 自然保護に関する 調査報告 (滋賀県) pp. 1-5。
- 3) 川村俊蔵・他 (1972): 滋賀県における動物の保護。滋賀県の 自然保護に関する 調査報告 (滋賀県) pp. 47-66。
- 4) 川村俊蔵 (1972): 滋賀県の 自然保護に関する調査報告補足資料一滋賀県における大型哺乳類の分布とその保護について。滋賀県 pp. 1-9。
- 5) 川村俊蔵 (1973): 兵庫県における ニホンザルの現状。兵庫県の 自然の現状 (兵庫県生活部自然課) pp. 95-99。
- 6) 川村俊蔵・他 (1972): 清川村ニホンザル調査報告一サルの生息状況および山村とサルの関係の未来像について。マカク研究会 pp. 1-16。
- 7) 河合雅雄 (1972): 森林のサルと進化。サイエンス 2: 32-48。
- 8) 東 滋・足沢貞成・森 治 (1972): 天然記念物下北半島のニホンザルおよびその生息北限地。緊急調査報告書 (昭和47年度)。
- 9) 東 滋 (1972): 岐阜県の自然環境保全に関する調査報告書 (哺乳類の部)。岐阜県。

学 会 発 表

- 1) ニホンザルのアカンボ期におけるあそびと社会関係
森 梅 代

第26回日本人類学会日本民族学会連合大会 (1972)

- 2) 霊長類とくにニホンザルの「て」の使用

江原昭善・河合雅雄

第26回日本人類学会日本民族学会連合大会 (1972)

- 3) 遊牧するニホンザルの群れ構造一山の中でのあつまりー

東 滋

第17回プリマーテス研究会 (1973)

- 4) 滋賀・兵庫・三重県におけるニホンザルの分布について

川 村 俊 蔵

第17回プリマーテス研究会 (1973)

変異研究部門

野沢 謙・江原昭善

和田一雄・西邨頭達

庄武孝義

研 究 概 要

- 1) ニホンザル集団の構造に関する数理的研究

野 沢 謙

ニホンザルにはその社会構造の単位として群れの存在が確認されている。群れの遺伝学的有効サイズ、群れの間の移出入率などは、ニホンザル集団の遺伝学的構造と動態を支配する重要なパラメーターである。従来から蓄積しているニホンザルの社会、生態学的知見を利用して、これらパラメーターを定量的に明らかにしようとするものである。

- 2) サルの蛋白多型現象の探索と遺伝的変異性の定量化

野沢 謙・庄武孝義

遺伝的多型現象の存在を明らかにし、その頻度分布をもとにして、サルの集団の構造と動態を統計学的に解明せんとするもので、現在は血液型と血液蛋白の遺伝変異を明らかにすべく材料の収集と検索を行なっている。

- 3) ニホンザルの先天的四肢奇形への遺伝学的アプローチ

野 沢 謙

- 4) 霊長類各分類群の頭骨諸形質の形態学的研究

江 原 昭 善

イ) 47年度にひきつづき、狭鼻猿各分類群のX線像について、顎骨の発達様式を比較分析し、一応その成果が得られたので Zeitschrift für Morphologie und Anthropologie に投稿し、現在印刷中である。

ロ) 霊長類各群の頭部支持機構について、47年度科研費総合Aの分担課題として、研究を送行し、X線撮影による資料を収集した。現在そのX線像について

解析中であるが、頭蓋底部のキフォーゼの他に、頸椎と針台の間にも、各分類群に共通して、種々の程度のキフォーゼがみられることを発見し、その成果をまとめつつある。

- 5) ニホンザルの生態、形態学的変異に関する研究
和田 一雄
- 6) インド産狭鼻猿の生態・形態学的変異に関する研究
和田 一雄
- 5), 6) については年報第2巻7頁参照。
- 7) 高崎山生息ニホンザルの行動と個体群動態

西 邨 顕 達

ニホンザルの行動の令変化に関する調査およびボビュレーション・センサスをいずれも高崎山において行なった。なお、後者は生活史研究部門の大沢秀行氏および杉山幸丸氏、および京大理学部自然人類学研究室の増井憲一氏との共同研究である。

なお、昭和47年度文部省 海外学術 研究員招へいにより、昭和46年9月1日より11月30日までキール大学のW. Herre 教授が来日、当部門の江原が対応し、日本人類学会、京大理学部、日本家畜学会、在来家畜研究会、名大農学部等で、講演および特別講義が行なわれた。

総 説

- 1) 野沢謙 (1972): 集団遺伝学の立場からみたサル。
バイオテク 3: 413-417。
- 2) 江原昭善 (1972): 人類学からみた化石人類の言語的生活。言語 7: 493-502。
- 3) 江原昭善 (1972): 外国人研究員とその対応教官の悩み。学術月報 9: 578-581。

論 文

- 1) Nozawa, K. (1972): Population genetics of Japanese monkeys. I. Estimation of the effective troop size. *Primates* 13: 381-393.

学 会 発 表

- 1) ニホンザルの四肢畸型への遺伝学的アプローチ
野 沢 謙
第17回プリマーテス研究会 (1973)
- 2) 霊長類とくにニホンザルの「て」の使用
江原昭善・河合雅雄
第26回日本人類学会日本民族学会連合大会 (1972)
- 3) Age changes in the vocalization of free-ranging Japanese monkeys.

Akisato Nishimura

Fourth Int. Congr. Primatol., Portland (1972).

- 4) ヤクザルにおいて固定された PGM₂ 座位の変異について

庄武孝義・大倉よし子・野沢 謙

第17回プリマーテス研究会 (1973)

- 5) ニホンザルにおける LDH および MDH アイソザイムの多型現象について

庄 武 孝 義

第17回プリマーテス研究会 (1973)

生活史研究部門

杉山幸丸・小山直樹

田中二郎・大沢秀行

研 究 概 要

- 1) ニホンザルの個体群生態学的研究

杉山幸丸・小山直樹・大沢秀行

1. 霊仙山生息ニホンザル地域個体群の動態。特定群の全個体標識識別を基礎に、出生・死亡・転籍による個体群変動を、長年月にわたる人口学的研究の一環として、継続進行中である。同時に、隣接する純野生群についても、精密さは欠くが人口学的変動の資料を蓄積しつつある。
2. 嵐山生息ニホンザルの個体群変動についての資料を集積し、現在共同研究者らとその分析を行ないつつある。
3. 高崎山生息ニホンザルの個体群動態。変異研究部門の研究概要参照。
- 2) インド亜大陸を中心とする狭鼻猿の動物地理学的研究

杉山幸丸・小山直樹・和田一雄

インド・セイロンに生息する狭鼻猿、*Macaca* 属と *Presbytis* 属の分布とすみわけの実態を明らかにし、種間および属間の環境への適応のしかたの変異を、主として、*M. mulatta* と *M. radiata* の分布境界線上で探る一方、異なった環境下における各種（とくに *P. entellus* と *M. mulatta*）の生活様式とその変異を、主としてヒマラヤ高地において探った。これは長期継続研究の第1段階である。

- 3) 狩猟採集民の生態人類学的研究

田 中 二 郎

現存狩猟採集民、とくに南アフリカのブッシュマンを対象に、生息地の食物量と遊動、摂食量、行動量、行動範囲から社会構造にいたる生態学的研究を進めており、究極的には各種霊長類の社会生態学的研究と関連させながら、人類進化の過程における生活様式の復元を試みよう